

## 特集 『許しと和解』

世界各地で様々な紛争が相変わらず続いています。また、昨年末にはインドネシア・スマトラ島沖地震と津波により大変な惨事が起きてしまいました。犠牲になられた方々やご親族の方々に心からの哀悼の意を表したいと思えます。大事件のニュースの陰に隠れて取扱は小さかったのですが、これまで2百万人が死亡、4百万人の難民が発生したと言われる20年余り続いて来たスーダンの内戦の停止が合意されたというニュースも報道されました。一つの希望を与えられるとはいえ長年の内戦に傷付いた人々が和解しそれぞれの心が癒されるためには、お互いを許しあうことが必要不可欠です。それなくしては平和の継続も危うくなってしまいます。私達の人生の中でも、「あいつだけは許せない」と思うような経験が必ずあるのではないのでしょうか？

しかし、「人を呪わば穴二つ」のことわざにあるように、憎しみは憎しみの感情を抱く人のこころを縛り蝕んでしまいます。今号では許すという行為が、許す人自身を救うことになるという事例もご紹介しながら、和解の重要性について考えたいと思えます。

### 「許し」

これは、MRA (現 IC) の専従者として活躍したスコットランド人のマット・マンソン氏 (故人) の体験した実話です。

1978年、アジアで働いていたマット・マンソン氏は、メルボルンから香港へ行く飛行機の中で、思いがけない話を聞きました。それは彼の人生に大きな影響を与えました。彼は自分の席に行き行って驚きました。な



んと隣の席には、ノーベル平和賞受賞者であり、死後の1999年には聖人候補者とされた、カルカッタのマザーテレサ(註1)がいたのです。

9時間のフライトの間、マットとマザーテレサは数多くのことについて語り合いましたが、彼女はマットに「許しはこの世で一番大切なことです」と話しました。彼女たちの仕事、『慈善のための修道女たち』は、許しを仲介することでした。それなしでは、神と人、或いは人と人の間に和解は生まれませんからです。それは、人類存続の鍵でした。

「それこそが私のところへ来て、共に仕える人全てに望むものです。私たちの仕事は、傷付いた人々を集め、亡くなって行く人々のお世話をすることだけではありません

#### ■主な内容■

◆ 「許し」・1-2

◆ 「ICと私」・3-4

◆ 訪中レポート・5-7

◆ 第2回日韓大学生フォーラム・レポート・8-11

◆ CRT ニュース・12

◆ 会員の活動紹介・13-14

◆ IC 国際会議のお知らせ・15

◆ IC ニュース・16

せん。私たちがお世話している人々が許しの経験を持つよう仲介をすることです。

## 老女のための祈り

彼女はこれのある話で例証しました。彼女と何人かの修道女は、カルカッタの路地で働いていました。そこで、治療が必要な人々を見つけ、その人たちを救急車に乗せ、彼らを「死を待つ人のホーム」に送っていました。ある日、彼女が救急車のドアを閉めようとした時、老女の泣き声が聞こえました。道に沿って辺りを見渡してみると誰もいませんでしたが、泣き声はやみませんでした。そこで、彼女は壁の向かいにあったゴミ箱に目をとめ、中を覗き込むと、酷い状態で血を流している老女を見つけたのです。「どうか、お願いですから助けてください」老女は言いました。「息子が私が死ぬようにと、ここに入れたのです」。

「私たちは彼女を助け出し、他の人と一緒に家に連れて帰りました。そして、彼女を洗ってあげ、世話をしました。その夜は、私の人生の中で最も困難な一日となりました。つまり、修道女の祈りや根気、そして粘り強さで、その老女が息子を許せる所まで持っていくということでした」。それは一晩申続きました。

早朝、その女性は言いました。「貴方に話したいことがあります。息子が幼かった頃、何かが起こった日のことを良く覚えているのです。私は息子を家から追い出し、あの子への心をすっかり閉ざしてしまいました。あの時から、あの子は間違った道を歩むようになってしまったのです。息子には頼る人がいなかったのだから、私が悪いのです」。

## もたらされた和解

マザーテレサは彼女に言いました。「もし、息子さんが今私たちとここにいたら、あなたは彼に許しを請いますか」。

彼女は「勿論です。息子を見つけてください」と答え、修道女に居場所を伝えました。彼女らは素早く動き、母に強く必要とされ、大きな問題を抱えた息子を見つけました。彼女たちは彼について来るよう説得し、母と息子は互いに向き合いました。

「それは苦悩の瞬間でした」マザーテレサはマットに言いました。「私たちにはどうなるか分かりませんでした」。

母は息子に「息子よ、私はお前が幼い頃私の人生から

お前を締め出してしまった。そして、お前は誰も頼る人がいなくなってしまう。お前が送らなければならなくなった惨めな人生に対しての責任は私にある。どうか私を許して欲しい」。

そして彼、その気の強い男は突然崩れ落ち、泣き出しました。「はい」、彼は言いました「でも、母さんは僕を許してくれますか」。その後すぐに、その女性は亡くなりました。「しかし、彼女は穏やかで平和でした。彼女は息子と和解しただけでなく、神とも和解したのです」とマザーテレサは言いました。

## 許しの仲介

マザーテレサは一袋分の手紙を持っていました。それが彼女の唯一の荷物でした。彼女はそれらの手紙がインドや世界中の若い女性からの、「もっているもの全てを放棄し、貧困と純潔、そして従順を受け入れ、必要とされる世界のどの場所にもでも住む覚悟があります」という申し入れだと説明しました。そして、「カルカッタに着くまでに、私はこれらの手紙を書いた人たちに返事を書く、それぞれがあの女性を仲介した私たちの経験を得ることができるか、確認しなければなりません。人々は、自分の罪と完全に向き合い、神にそれをゆだねない限り、それを経験することは出来ないでしょう。もし人生において許しの経験があれば、その人はすでにそれを身に付けています。私に手紙を書いてくれた人全てが、その経験があるか、この作業に入る前に確かめたいと考えています。もしそれをしていないのなら、彼女らはおそらく、5年、10年の内に私たちのもとから去ることになるでしょう」。

マットは後にこう述べています。「香港で飛行機から降りた時、彼女が私に語ったこと全てを思い返しました。それは私が、許しを仲介する道具として自分の人生を神に捧げると改めて誓うことを意味しました」。

(マイケル・ヘンダーソン著、『FORGIVENESS (許し)』より翻訳)

(註1 マザーテレサ:本名は、アグネス・ゴンクァ・ベジャキュー。1910年、スコピヤ(現マケドニア)のアルバニア商人の家庭に生まれる。12才で尼僧を志し、18才でロレッタ修道院へ、その後、1929年に19才でカソリックの修道女としてインドへ渡る。1931年にカルカッタにあるロレッタ修道会経営のセントメリー高等学校で教鞭を取り、後には校長を務める。1948年、最も貧しい人々に仕えるためスラムでの救済活動を始める。1950年、インドに帰化。12人のシスターと共に「神の愛の宣教教会」を設立。1979年にノーベル平和賞を受賞。1997年、死去。インドで国葬が執り行われた。)

イスラムの方々への理解を深めるため、前号よりIC(MRA)と出会ったイスラム教徒の体験や考え方をご紹介していますが、第2回は部族間の紛争が続いているアフリカのソマリアの二人の方の許しと和解のストーリーです。

## ◇ IC と 私 ◇



### 輝いていた未来

#### ユセフ・オマール・アルザハリ博士

ソマリア（註2）、元アメリカ及び国連大使。1969年の軍事クーデターの後、捕われ独房で6年を過ごす。この憎しみを克服した彼の体験は、悲惨な状況下にある自国の再建に向けて取り組む仕事へと彼を導いた。

大使を務め、国のリーダーを自負した私にとって、未来は輝かしいものに思えました。その将来図を完全なものとするために、大統領の娘と結婚すべきと考え実際にそうしました。私の未来は保障されたように見えていました。

しかしまったく突然に、私の義父が暗殺され国は軍事政府に奪取されてしまいました。全てが変わり始めたのです。一年後、私はモガディシュ（ソマリアの首都）の家で午前三時に手錠と目隠しをされ、誘拐されました。そして、そこから350km離れた場所の12平方メートルの独房に押し込まれました。私はそこにたった独り監禁され、読むものも話し相手もないまま6年を過ごしました。最初の6ヶ月間は毎日拷問を受けました。怒りと憎しみに支配された私は、当たるものがあれば必ず激しく殴りつけていました。私は気が狂うか、死んでしまうのではないかと思いました。私の頭は破裂しそうだったのです。

絶望の中、ある夜の8時にひざまずいて祈り始めました。神に、内なる平和と生きるための目的を得られるよう願いました。私が膝を上げたのは午前4時でした。8時間が8分間のように感じられました。人生においてこの8時間の祈りに優る祈りの時間はありませんでしたし、精神が高められた気がしました。癒され、憎しみや絶望、抑うつから解き離れたように感じました。欲や快楽に対する願望が消え去りました。そして、私の取った行動全てに責任があると感じました。

#### 一夜にしての変化

翌朝、看守達は私の落ち着いた従順な態度に驚いていました。もはや私が反抗していた時のように、私を拷問することはできなくなりました。どうして一夜にしてこのように私が変わったのか、不思議がっていました。私

は、この牢獄生活を受け入れ、その時間を運動とこれまでの自分と向き合っていく時間とに振り分けたのです。過去に犯した過ちを何時間にもわたって振り返りました。

しかし、同時に良かったことにも考えをめぐらすことで落ち込まずに済んでいました。6年間の監獄生活は他の方法では得られなかった人生の勉強をさせてくれました。

#### 家族の所在を求めて

1991年に国を占領した軍の支配者達は退けられ、司令官であったモハメド・シアド・バレ將軍はナイジェリアに亡命しました。監獄から出られた私は、家族を探し回り、小屋に住んでいた彼らを見つけました。妻は私を見た瞬間、気絶してしまいました。私は逃げようとした時に撃たれたと聞かされており、投獄されていたとは夢にも思っていなかったのです。

#### 許せるだろうか？

私は、「あらゆる苦難を自分にもたらした人間を許せるだろうか」と自問し続けていました。喫茶店で座っていたある日、私を悲惨な目にあわせた人間を許すべきだと強く感じました。悩み続けて二年経った頃のことでした。しかし、銀行口座から家まで全てを没収された私にどうやってナイジェリアまでのチケットを買うことが出来るのでしょうか？ そんなお金はありませんでした。しかし、許すと決めた3日後に、西アフリカでの国連会議にソマリアの代表として出席することを依頼されたのです。こうして、私は87歳となった元独裁者を訪ねられることになったのです。彼を許したと伝えるためだけに長い道のりを行きました。將軍にそれを伝えたとき、彼の頬を伝う涙を見ました。彼が改悛する機会を与えてく

ださった神に感謝しました。彼は、「ありがとう。貴方は私を癒してくれた。貴方のような人々がソマリアにいると知ったので、今夜は眠ることが出来るでしょう」と言いました。

### 恐れずに助ける

この経験をして以来、公的な役職にはつかぬまま、母国の平和や融和のために働いてきました。私たちには、政府も司法、警察、学校もありませんでした。しかし、この許しの経験は、誰をも助けろという自信と気付きをもたらしました。これは今では私の生き方になっています。これが他人の心を勝ち取る正直なやり方だと気付いたのです。

### 謝罪の準備

10年前、スウェーデンのICの友人たちの助けを得て、自分の過ちや憎しみの謝罪を通して、他のソマリア人と友情や信頼を築く方法を見つけました。私達は今、自国を建て直し、行政を再生する方法を見つけ出したところです。アラーの神を通して、私達、ピースメーカーはこの新しいアプローチこそが正しい国作りに繋がっていると気付かされたのです。

(註2 ソマリア：1991年に全国的に内戦が勃発。現在に至るまで対立氏族間の抗争が続いており、全土を実効的に支配する統一政府は存在していない。2002年10月より、ケニアにてソマリア国民和解会議が開催されている。宗教はイスラム教徒が95パーセントを占める。)

## 憎しみからの開放

### アーメッド・イーガ

ソマリアからの難民として現在スウェーデンに在住。1978年にソマリア救済民主戦線の創設に関わり、10年間ゲリラ活動に従事。曾祖父は、ソマリアの氏族の長であった。



私が25歳の時、当時のソマリアの独裁者は同じ氏族であったにも拘わらず私と私の家族全員を逮捕しました。私は一年後に開放されましたが、市民権を失いエチオピアに亡命しました。そこでも、他の知識人たちと共に、一緒に戦ってきたゲリラのリーダーの何人かを批判したことにより、もう一年牢獄で過ごすことになり、心の中に憎しみの気持ちが宿りました。

開放された後、武力で目標を達することはできないだろうと考え、スウェーデンに亡命しました。ポーランドの農民の「連体」の活動のリーダーであった一人の難民とあったのは、スウェーデン語の勉強会でのことでした。自分自身から変わり始めなければいけないということを、彼から学びました。その時までは、他の人たちがどう変わる必要があるかということばかり考えていたのです。

### 憎しみに対する謝罪

ソマリアでの戦争と飢餓が最悪の状態になった1993年に、私はあるスウェーデンの救援機関と共に、故郷に行く機会を得ました。その旅は、以前のゲリラのリーダーと会い、彼に抱いていた憎しみの感情を謝罪する機会を与えてくれたのです。チャンスがあれば彼を殺したいと思っていたと白状しました。しかし今では、彼への憎しみから開放されたと伝えることができました。そし

て彼は徐々に私の気持ちを理解し、私を許してくれました。

その時、私は、「今度は私達の最悪の敵であるアイディド将軍を許さなくてははいけませんね」と言いました。「アーメッド、君の考えは行き過ぎた。あの男は、我々の許に数千人の孤児をもたらした人間じゃないか。もし、私があつた男と和解したら、あの子達が私を許しちゃくれないさ」と彼は答えました。

「もし私達が平和を作らなければ更に多くの子供達が孤児となり、やがては私達を責めるに違いありません」と私は言いました。

4週間後、BBCのソマリアのニュースで、このゲリラリーダーが仲間と共にモガディシュに出向き、飛行場でアイディド将軍と和解したと聞き驚きました。私達の会話がその原因になったのかどうかは知る由もありませんが、この和解が成ったことを心から有り難く思います。私の元上官であったこのゲリラリーダーが許しと和解について理解し始めたことはソマリアの将来にとってとても重要なのです。なぜなら、正に彼は、国が新たに政府を発足させるに当たり、異なる派から選ばれた5人の人間の内の一人だからです。

(共に CAUX BOOKS『何故テロか—他に選択肢はないのだろうか? /Why TERROR—is there alternative?』から翻訳)

## 中国国際交流協会の招聘による日本 IC グループの第2回訪中

和解ということ考えた時、未だ歴史の暗い陰を引きずる日本と東アジアの国々との関係が直ぐに思い浮かびます。昨年10月10日から16日にかけて、中国国際交流協会の招聘により、第2回のIC訪中団として橋本徹国際IC日本協会会長を団長に7名のメンバーが訪中し、北京、西安、上海で中国の方々と率直な話し合いを重ねて来ました。北京から上海まで付き添ってくれた中国国際交流協会の役員の方が、「これまで、アフリカが担当で日本人と触れあう機会は余りありませんでした。また、小さい時から自分の親戚が日本軍に殺されたと祖母から聞かされて育っていたので日本に良い感情を持っていませんでしたが、今回日本の方々のお話を聞いたり会話を重ねていく中で日本人への見方が変わりました」と言ってくれたのは有り難いことでした。訪中団のメンバーの中山啓介氏より感想を寄せて頂きました。

### 歴史認識について語り合い、考えたこと —真の友好関係を築くために—

中山 啓介 (アジアセンター ODAWARA 所長)

昨年10月、私は中国国際交流協会(CAFIU)の招きで、日本IC(MRA)訪問団7名の一員に加わって、北京・西安・上海を1週間にわたって初めて訪問する機会を得ました。私自身学生時代の1963年より、IC(MRA)運動やその後自動車関連の仕事の関係でインドを皮切りに、アメリカを初めヨーロッパや東南アジアなど外国にはかなり足を運びましたが、これまで中国(大陸)を訪問したことは皆無でした。永い間待ち望んだ夢がようやく実現することになった訳です。私は、まだ見たことのない中国に対し、少年のような好奇心と一種の憧れと、同時に畏怖の気持ちを抱いて参加させていただきました。スケジュールは別記の通りです。ここでは、本号の主題「許しと和解」に沿って、私の体験と感想をベースに日中関係について考察してみたいと思います。

私は、この訪問団への参加に際し、次のような二つのテーマを自らに課していました。一つは中国国際交流協会の関係者の方々と率直な対話を通じて、日中間の相互理解の促進と友好の増進に努める。二つ目は、中国の歴史的遺産にできる限り触れると共に、中国の人々の暮らしと発展する中国の現況をありのままに観察することでありました。

振りかえって、一日一日が極めて有意義で充実した出会いであり日々でありました。直接的には、交流協会の方々との周到な準備と二人の専属スタッフ(羅毅協会理事:昨年夏の日韓中3国の青年会議の中国側責任者、王琳さん:日本語通訳者で昨年の小田原国際会議参加者)の最初から最後までのお世話取りのお陰で、何のトラブルもなく、行く先々で最高級のおもてなしを受けました。それには約30年近くに亘って築いてこられた榊副会長らの小学校建設を含む友好事

業の実績のベースがあり、橋本会長が富士銀行頭取時代に尽力された、北京大学に開設された中国の若手の金融マンを育成するための事業(講座開設)などの実績があつてのことでした。それと共に、過去10数年にわたり、イギリスなどの主導により育んできた国際ICと中国交流協会との間の交流の積み重ねがあつたことも、与つて力があつたことを後日知りました。また、それは一昨年の郁文団長(協会顧問)らの訪日、昨年李揚協会理事らの訪日と国際会議への参加、その前に遡れば2001年の相馬雪香会長(当時)らの訪中などの実績を踏まえての成果でもありましょう。このことは、行く先々でのホストの歓迎の挨拶よりよく感得することができました。

### 率直な対話と歴史認識の深め合い

初日の歓迎晩餐会を前にした会見の席上、万国権協会顧問は、中日国交回復後の30年余り、共に関係増進に努力してきたことに触れた後、「MRA(現IC)が、戦後独仏の和解に貢献したことを承知している。今後の交



●暖かく迎えて下さった旧知の郁文顧問(後列中央)を初めとした中国国際交流協会の皆さんと日本からの訪問団のメンバー(後列左から2人目が中山氏)

流増進を期待すると共に、近年の靖国神社を巡る日本側の対応、とりわけ歴史認識については、問題視している」旨を強調されました。これに対し、橋本会長は、温かい歓迎に謝意を表した後、「日中は国交回復後30年余り、共に友好促進に努めてきたが、最近の北京でのサッカーの試合に見られたように、日中友好の実現はなかなか難しいと実感している」旨を率直に伝えられました。そして、「日本の近代化・明治維新の発端は西欧列強の圧力に対して、独立を維持することであったが、その過程で中国には大変ご迷惑をおかけした。それは親の世代に起きたことではあるが、そのことは、申し訳なく思い、率直にお詫び申し上げる」旨述べられました。また、「個人的には、富士銀行の頭取時代、金融に関する講座開設の資金を提供し、人材育成に微力を尽した。毎年、講座開講時には中国を訪問し、挨拶をしていたので、特別に感慨深い。IC (MRA) の交流を通して、相互理解の増進に努めたい」旨、伝えられました。翌日、一行は協会本部を訪ね、李成仁常務副会長と約1時間半にわたり、広範な話題について情報交換並びに意見交換



●人民大会堂で話し合う万 国権中国国際交流協会顧問と橋本徹国際 IC 日本協会会長及び神たか子同副会長 (左端)

を行ないました。日中間の人的交流の歴史や両国間の経済関係の拡大に話が及んだ時、李氏は日本のODAについて、中国は日本に感謝している旨明言されました。ここでも最後は日中間の歴史認識の問題と台湾問題が話題に上りました。台湾問題では、武力衝突という事態にならないよう、どこまでも平和的な解決を貫いて欲しい旨伝えました。また、日本は唯一の被爆国として、核兵器の使用はいかなる場合にも、容認できない旨を伝えました。中国側の答は、勿論平和的解決を第一に考えるが、場合によっては武力行使を放棄するものではないというものでした。

私達は、歴史認識の問題では、靖国神社参拝の問題を筆頭に、中国側交流協会幹部の方々とその他にも様々な場面で率直な対話を行ないました。私自身もここ数年、毎年、靖国神社を参拝していますし、その行為趣旨については相手方に率直に伝えました。中国側は、一般庶民が参拝することに反対するものではない、指導者層の歴史認識が問題なんだということでした。自由な選挙に

よって、政治指導者を選ぶ我々日本人にとって、これは一体どういう風に受け止めるべきなのでしょう。

北京滞在中、私は特に希望して、日中戦争(日支事変)の引き金になった盧溝橋とそのそばに立つ戦争記念館を案内していただきました。この記念館は、正しくは「中国人民抗日戦争記念館」というものです。(ここが、今も日中間で未決着のいわゆる“南京大虐殺”の記念館と共に、反日教育の砦になっているらしいという認識を、私は持っていました)。ここで私は、自分がこれまで持っていた日中戦争についての認識が、マスコミや本を通じて、あるいは一部の体験者の断片的な話を通じての極めて薄っぺらい、日本人の目からだけ見た、一方的かつ一面的なものでしかなかった、ということを知られました。ここで初めて、私は同じ日中戦争という歴史的事象を、中国人の目で、戦場になった中国側から見る機会を得たのでした。これにより日中戦争に関する私の歴史認識と、その後の内戦を経て生まれた中華人民共和国の誕生とその後の歩みについて、私の中国に対する認識は一変しました。二宮尊徳の思想に倣えば、これまでの半円観から一円観に一大変化した、というものでした。



●李成仁中国国際交流協会常務副会長との率直な意見交換

## 日中関係を 長期・中期・短期(近現代)で考察

想えば、日中間には、明らかな史実に照らしても、約2千年に及ぶ長い交流の歴史があります。遣隋使・遣唐使の時代には、日本は古代中国唐の長安(現、西安)を国創りのモデルとし、多くの優秀な留学生や留学僧が、国家的プロジェクトとして、命がけて彼の地に渡り、進んだ法制度や文物を採り入れました。インドで生まれたお釈迦様の教えは、中国語に翻訳された經典と共に中国化した仏教として日本に採り入れられ、根付いたのです。中国の様々な古典や歴史書、更には諸氏百家の教え、中でも孔子や孟子の教えを伝える四書五経は、江戸時代は幕府の公認の学問としてだけでなく、広く日本文化の礎となり、社会の道徳的な規範にもなっていました。特筆すべきは、中国より採り入れた漢字で、これが平仮

名・カタカナを産み、日本文化・文明の元となり核となっているという事実です。私達自身にとって最も重要な本人の名前、日本人としての存在証明である名前も漢字で表します。このことに対し、私は限らない感謝を覚えます。(私は青年時代、誇り高い文化を持ちながらも、文字を持たないアメリカインディアンの人々と生活を共にし、文字を持つ事・持たない事の意味とそのもたらす恩恵の違いを痛感しました)。

ところが幕末から明治維新以降は、国づくりのモデルはもっぱら欧米先進国となり、近代化に成功した日本は日清戦争(1894~95)に勝利し、次いで国運をかけた日露戦争(1904~05)にもかろうじて勝利し(日本海海戦の戦果が余りにも劇的だったため、国民は戦争全体に大勝したと錯覚して、日本人の誇りはやがて奢りに増長した)、これを機に次第に欧米列強のパワーゲームの中で生きる道を選択していくことになりました。

その後、第一次世界大戦中に於ける、日本の野心丸出しの対中国21か条要求(1915)には、厚かましきを通り越して恥ずかしきを感じます。

その後、満州事変(1931)から日華事変(1937)に戦火は拡大、日本は宣戦布告するだけの大義名分もないまま、ずるずると戦線を拡大し続け、終には日米交渉の決裂から真珠湾攻撃を機に太平洋戦争に突入し、やがては日本本土も焼け野原にされて終戦を迎えたのでした。

一方、中国大陸では、日本の現地派遣軍は、個々の戦闘では決して負けてはいなかったものの、ポツダム宣言の受諾と共に、結局は敗戦を受け入れざるを得ない状況となったわけです。その間の事情がよく理解できました。と同時に、中国側からすれば、日本が日華(支)事変と呼ぶところの戦争は、外国(日本)から国土を守るための独立をかけた自衛の戦争であり、国共合作までして戦ったまさに総力戦であったということです。私達日本人は、この事実をよく知らなければならないと思います。その後、4年間にわたる内戦を経て、1949年10月1日、新中国が誕生するわけですが、この戦争を世界史に例を見るならば、アメリカの独立戦争(1776)に、日本の近代史に例をとるならば、国運をかけて戦い独立を維持できた日露戦争に相当するものではないか、というのが私の感想です。

歴史を鑑にして日中関係を考えるとき、かつて師と仰いだ中国を、日清戦争を境に日本は中国を侮るようになり、中国もだんだんと侮られるようになり、弱肉強食のルールが幅を利かす列強のパワーゲームの中で、その餌食とされてしまったことは誠に不幸なことでありました。国が自立する、独立を全うする、他国に侮られないということは、その国民の安寧と幸せにとっていかに不

可欠の要素であるか、ということがよく得心できます。また、誇り高き中国の人々が、その魂に受けた屈辱の深さは一体どれほどのものであったであろうか、私達日本人はこの視点を絶対に欠かしてはなりません。

## 日中関係の将来展望

これは、IC(MRA)運動に携わるイギリスの知人から最近知らされたことです。戦後、駐日大使を務めたことのあるフランスの外交官は、「今世紀、世界の最重要課題の一つ、いや最重要課題というべきは日中関係である。しかしながら、過去を癒すということに関しては、殆ど手付かずのままである」と言っています。

日中間の相互理解と相互信頼をいかにして築き上げるか。どうすれば不信の連鎖や不信増殖の連鎖を断ち切り、不信の溝に橋を架けることができるだろうか。その最も有効な手がかりの一つを与えてくれるのが、相互の交流であり、その促進を更に図ることにあると思います。それを通じて、お互いがまさに歴史を鑑として謙虚に学びあうこと。感謝すべきは感謝し合い、尊敬すべきは尊敬し合う、また、謝罪すべきは謝罪し、許し許される体験を個人のベースで愚直に進めていくことではないでしょうか。そこに相互理解と相互信頼、相互の尊敬の念も生まれ育まれていく素地があると確信します。そして、将来、日中の青年がインドの青年らとも手を携えて、地球的規模の問題に共同で立ち向かう、また、紛争や飢餓や貧困の問題に悩むアフリカの同胞の問題に共に取り組む、そんな夢を抱き続けています。そして、そのために微力を尽していきたいと念じております。

10月10日(日)

万国権中国国際交流協会顧問(前全国政治協商会議副主席)による歓迎レセプション

(於:人民大会堂)

李成仁中国国際交流協会常務副会長、

羅揚中国人民銀行国際部副司長等同席

10月11日(月)

李成仁中国国際交流協会常務副会長との意見交換

倪健全国青年連合会副秘書長を表敬・懇談

郁文中国国際交流協会顧問による歓迎レセプション

李揚中国国際交流協会理事、羅毅中国国際交流協会理事等同席

10月12日(火)

秦始皇帝兵馬よう博物館見学

裴長菊陝西省人民政府外事弁公室副主任による歓迎夕食会

(橋本会長は、北京ハイテク開発区等見学)

10月13日(水)

法門寺見学

楊凌農業ハイテク産業モデル区見学

閻鉄太陝西省財政庁副庁長による歓迎夕食会

10月14日(木)

邵慧翔上海市人民政府外事弁公室主任による歓迎昼食会、

浦東梅園住宅見学

10月15日(金)

烏鎮訪問、上海市新開発区(新天地)見学

10月16日(土)

上海市城市企画展示館経営管理センター等見学

## 第2回日韓大学生フォーラムの開催

韓流うんぬんと言われながらもやはり更なる和解が求められる日本と韓国です。昨年の11月19日から24日にかけて、「21世紀の日韓青年の文化の理解～映像と共に進む日韓青年の文化の探究～」をテーマに第2回日韓大学生フォーラムが韓国MRA/IC本部の主催、大韓民国文化観光部、MRA/IC国会議員連帯の後援の下、ソウルで開催されました。今回は、日韓の青年が共に街に出て、韓国の青年たちの色々な文化の側面をビデオに納め、編集して発表し合ったのを初め、日韓の伝統的な服飾文化や礼儀についての紹介、ホームステイの体験や率直な意見交換等、様々なプログラムを通してお互いの文化への理解を深め合うことにより相互の友好が促進されました。

日本からは、芝浦工業大学、上智大学、玉川大学、中央大学、日本大学、竜谷大学、早稲田大学の大学生20名、及び早稲田大学への韓国からの留学生1名を含む計21名が参加しました。韓国からもほぼ同数の大学生が参加しましたが、初日からお互いに打ち解け、別れの日には多くの涙が流されたのを見ても両国の参加者にとって、この会議がかけがえのないものになったということを示していると思います。会議の参加者の感想をご紹介します。

### 一変した韓国のイメージ

鈴木 祐多 中央大学法学部4年

今回この交流に参加させてもらい、私は様々な経験をしました。今回のこの交流で韓国の人々の温かさに触れた気がします。私は物覚えが悪く、同じ韓国語を何度も何度も教えてもらったりしても、笑顔でそれに答えてくれたり、人見知りする私に積極的に話し掛けてくれたり、困ったことがあっても何度も何度も助けてくれました。以前の自分だったら、絶対に快くそんなことが出来なかったと思います。しかし、このような韓国人の温かさに触れたことによって、自分も少しでも見習えたらと思います。異文化の人々と短期間ではありましたが、寝食を共にしたことによって、また、一緒に笑いあったりした中で文化や言葉の違いはあれども、中身は我々と同じ一人の「人間」なのだと感じました。今回編集などの作業により苦しみを分かちあい、言葉の壁を越えられたような気がします。

### 一変したイメージ

自分は韓国と言ったら学校の授業で教科書から習う事以外では冬のソナタ、ペ・ヨンジュ、シュリなどの映画などのイメージしかなかったのですが、今回の経験によりそのイメージも一変しました。今回自分が韓国に行って一番驚いたことは、韓国の空港に着いた時にスンピョ君と韓国の兵役問題について話した時に、彼が「自分は兵役には出来れば行きたくない、兵役に行くと勉強が出来なくなるからだ」と話していたことです。その言葉に私は衝撃を受けてしまいました。自分は日本に生まれ、戦争についてはまったくと言っていいほど無知で、戦争と言ってもピンと来ない世代に生まれ、歴史の教科書に出ている、ただテストでいい点を取る為に勉強する事柄ではなく、ここ韓国では、戦争というのはリアルな現実であり、自分より2歳年下のスン

ピョが来年には兵役に入ると聞いて、のうのうと何も考えずに、ぬるま湯に漬かってしまっている自分がとても小さい人間なんだと感じました。

### 大切な記憶に残る親友

帰国してから3日がたちましたが、まだ自分が韓国人の友達とあの夢のような空間にいるような感じがして、とても切なくなります。イーメールなどで連絡は取り合っているものの、何か自分の胸にポッカリと大きな穴が空いたような気がしてなりません。最終日の朝、ホテルでお別れをした時に、流した私達の涙は今回のこの交流が成功したものだと裏付けるものだと思います。今回この交流に参加させてもらうことが出来て、言葉では言い表すことが出来ないくらい、感謝しています。この交流でただ寝食を共にした仲間ができたのではなく、一生大切な、記憶に残る親友を作ることが出来てとても幸せです。この交流をずっと続けて、韓国人と日本人にみんなと同じような、またはそれを超える経験をしてもらいたいと思います。



●参加者全員で撮影（開会式後）



## 日韓両国、そして世界のための架け橋に

谷田なつ美 玉川大学文学部教育学科4年

感想はたくさんあるが、以下3点に絞って述べたい。

### カン・ヨンペ博士の講義から

「交流するには、何が違うのかを見るのではなく、何が似ているのかを見る」という言葉が胸に響いた。

私は今までに、12カ国を訪れた経験をもつが、どこか違いを意識していたように思う。カン・ヨンペ博士の話の後、ソウル市内やこのフォーラムに参加した韓国入学生を見てみると、日本と同じ点や似ている点が多いことに気づいた。また、今まで訪れたどんな国よりも、自分が緊張せずに自然と馴染んでいることがわかった。そして、自分は韓国について実は何も知らないことや、また日本語が上手に話せる韓国入学生に対して、自分は韓国語を話せていないことに恥ずかしく思った。韓国をもっと知って、もっと勉強して、もっと話せるようになりたい、そしてまた来たい！ そう強く思った。

### グループでの映像撮影

私達、第5グループは「大学生活文化」というテーマだった。言葉がなかなか通じない中で、キム・アーヨンさんが一生懸命に通訳してくれた。また、みんなのいいものを作ろうとする意欲によって、いいものができた自信をもって言える。私達の育ってきた環境や文化は違う。でも私達が話しているのは一人の人間であって、見ているのはその人自身、パーソナリティーであること、それに改めて気づく機会となった。

### ホームステイ

私は、リー・ミンジェさんのお宅にお世話になった。みなさん、本当に笑顔がステキで、とても温かく素晴らしい家族であった。その夜に、ミンジェさんのお父さんと本音で話すことができた。2時間ほどの会話の中で、私自身のことから日本のこと、歴史的な両国の関係、また私がタブーと思っていた内容まで深い話をした。最近の日本は、韓国人気スターや冬のソナタなどで「韓流ブーム」と言われるほどの社会現象を呼び、韓国への旅行者は爆発的であるという。これからも日本と韓国はますます親密になっていくと言える。

私は今まで日本と韓国の関係を小、中、高校と学んできた。学ぶたびに、日本がしたことショックな事実を

知り、大変胸が痛んだ。そして今回、実際に訪韓し、ソウル市内の歴史的な建造物を訪れ、日本の戦争の傷跡やその説明文を見るたびに、大変申し訳ない気分がいつぱいになった。現在、「反日」という感情が残っているのも受け入れられる。私は何をすればいいだろうか。歴史は変えることはできない。だが、その歴史から学び、二度と悲惨なことは繰り返さない、平和・命の尊さを訴え続けることはできるはずだ。それは今現在を生きる私達の責務である。そのために、私は今よりもっと勉強して、将来、教師として子どもたちにそれをしっかりと教えられるように日々、努力する覚悟である。

「勉強するということは、変わるということだ。変わらない勉強は、本当に勉強していないということだ」。訪韓後、私が毎週行っている児童館の館長がそう話された。私は、この意味で本当に勉強したいと思う。

ホームステイの時に、ミンジェさんのお父さんから、「これからも長く付き合っていきたい」「もっと韓国を学んでほしい」と、お父さん直筆の本を一冊下さった。また、ミンジェさんのお母さんは、「ありのままの歴史を伝えてほしい」、「あなたは私の娘！」と、言って抱きしめてくれた。大変うれしかった。韓国に私のもう一つの家族ができた。ミンジェさんの家にホームステイをすることができて、本当によかったと心から思う。

最後に、今回のフォーラムは韓国で行われたが、次は日本で行ってみたいと思う。

もっと交流して、私達で輪を広げて、もっと両国のために、そしていずれは世界のために貢献できることを共にしていきたい。そして、この小さなフォーラムが大きな意味を持ち、私達がやがて日韓両国、及び世界のために発信、貢献できるような未来の架け橋となることを切に願いたい。



●伝統衣装を交換して着てみる参加者（左側が谷田さん）

## 理解のギャップを痛感したフォーラム

白濱 史教 早稲田大学政治経済学部 1年

今回の日韓大学生フォーラムで、私は様々なことを学べた。そして、ここで得られた経験・知識は私の今後の人生で大きな役割を果たすことは間違いないと断言できる。思い返せば思い返すほど語りたいたいことが増えていき、きりがないので最も印象に残ったことだけここでは述べさせていただきます。

私が最も印象に残ったことは、韓国側から度々聞かれた質問である。「韓国の歴史をどれだけ知っていますか?」「日本では歴史をどのように、またどれだけ学んでいるのですか?」「第二次世界大戦を知っていますか?」など歴史認識についての質問だ。私が「日本では歴史は基本的に受験の道具としての暗記科目に過ぎず、学生は特に詳しくやらない」と答えたら、彼らはがっかりしたのかとても悲しい顔をしていたのが脳裏に焼きついており、その表情を私はおそらく一生忘れられないだろう。

韓国側の学生を含め、課外活動やホームステイで私が出会った韓国人は皆親日だった。日本に興味を持ち、日本にとっても好感を持っていた。彼らは日本の文化・歴史をしっかり認識しており、多くの韓国人は日本語を様々な方法で勉強して接してくれた。「日本」という国をしっかりとして受け止め、迎え入れようとしていてくれたのである。

しかし日本側はどうだっただろうか。韓国文化や歴史をしっかり理解していただろうか。私を含め多くの学生は、最も近い国のことをキムチなどの料理やヨン様などといった断片的な知識としてしか知らなかった。その韓国側とのギャップが今回のフォーラムで痛感したことである。

「文化交流・文化探究・文化の相互理解」を銘打っていた今回のフォーラムで、私たち日本側は韓国から学ぶだけの一方通行であったのではないかと思う。先の歴史問題でいえば日本の是非がどうこうではなく、韓国側はその歴史についての意見を求めていたのに、私たちはその大事な問題すら詳しく知らなかった。「文化交流」においてこれは相手に対して最大の侮辱だったのではないかと、今深く反省し後悔の念がやまない。

「韓流」といって韓国がクローズアップされている現在、ただドラマを見て喜ぶのではなく、しっかりとその興味ある国の背景を見つめることが必要である。お互いが文化・歴史をある程度認識し、同じ高さで交流して初めて「文化交流」だ。今韓国ブームでちょうどいい機会だと思うので、ただ物好きで終わるのではなく興味から昇華させていくべきである。

今回のフォーラムで私は反省すべき点が多かったが、これを糧に今後よりいっそう頑張り、世界の交流に役立てたいと思う。

## 「文化交流」の原点を感じたフォーラム

呉 世蓮 早稲田大学教育学部教育学科1年 (韓国から留学中)

私は今回のフォーラムに日本側ではなく韓国側として参加し、最初は立場が定まらず、あたふたしていました。色々とわからないことや不安ばかりでどうなるのか心配だったのですが、一日目を終えた後から韓国・日本の両国のみんなが優しく手助けして下さり、無事馴染むことが出来ました。私にとってこのフォーラムのような集まりは初めてだったのですが、個性あふれるメンバーが多く、みんな気さくだったのですぐに仲良くなれました。そのおかげで団体行動を楽しむことが出来、フォーラムを十二分に満喫することが出来ました。今回のフォーラムで仲良くなった仲間とはフォーラムで終わりにするのではなく、今後とも付き合っていきたいと思います。今回のフォーラムでまず得たことは、これらかけがえのない仲間たちと、その仲間たち

と過ごした貴重な時間と経験です。

そんな和気藹々とした今回のフォーラムで私が最も強く感じたことは、韓国・日本の人たちと中立な立場から接することによって見えてきた文化の違いです。



●韓国伝統の挨拶の仕方を学ぶ参加者達

いままで私の主観的な観点では韓国と日本の違いがそれほど明確にわからなかったのですが、今回客観的に両国の活動に接してみてもはっきりとわかりました。寝食や行動をとともにして、様々な文化の違いが眼に映って見えたのですが、私を含めみんなが一生懸命に交流を深めようとしていたのが印象的でした。言葉では表現しがたいのですが、「文化交流」の原点を見ることができたような気がします。このような貴重で素晴らしい経験が出来たこともこのフォーラムでの成果だと思います。

私は今回の活動を通して、しっかりと韓・日の文化交流を感じることが出来ました。そして自分自身をより高めることが出来ました。このフォーラムでしか得られなかったであろう仲間たちとの交流や、今回感じ、そして学び得た経験や知識を活かして、これからの大学生活やその後に役立てて頑張っていきたいと思っています。

このフォーラムをフォーラム内だけで終わらせるのではなく、今後より広い場で活動し、IC/MRAの崇高な精神を実践していきたいと思います。



●すっかり親しくなった参加者達

### 【スケジュール】

#### 11月19日(金) (第1日)

12:00 仁州空港着  
 16:00-17:00 開会式  
 鄭 元植前国務総理等出席  
 17:00-18:30 歓迎夕食会  
 19:00-20:00 講演  
 テーマ: MRA/ICの生き方  
 講師:長野 清志 (国際IC日本協会)  
 20:00-22:00 日韓青年交流の夕べ  
 参加者オリエンテーション  
 自己紹介  
 両国からの演し物、組分け  
 (国際青少年センター泊)

#### 11月20日(土) (第2日)

09:00-10:00 講演  
 テーマ: 21世紀の日韓の青年文化  
 講師:カン・ヨンベ (姜 永培) 博士  
 (韓国青少年開発院 客員研究員)  
 10:00-11:30 日韓両国の大学生からの発表  
 韓国及び日本の青少年文化について  
 (各国2名づつ)  
 13:00-14:00 日本で用意して来た映像  
 (日本の青少年文化) の発表  
 14:30-16:30 映像撮影の理解 講師:李 康吉  
 (メディアセンター、デジタルカメラ  
 講師)  
 19:00-20:30 「ジャンプ」(韓国伝統の打楽器のリズムと武術を組み合わせる仕立てた劇)  
 観覧 (国際青少年センター泊)

#### 11月21日(日) (第3日)

09:00-12:00 日韓伝統文化の体験活動  
 韓国の伝統的な礼儀作法の紹介  
 礼智院 孔教育担当講師  
 日本の伝統衣装、礼儀作法の紹介  
 13:00-22:00 映像の撮影 (\* 註)  
 (国際青少年センター泊)  
 [\* 註: 1. 交際文化 (同性、異性) 2. ストリート文化ファッション等) 3. 遊び文化 (テレビゲーム他) 4. 飲酒文化 5. 大学生生活文化の5つをテーマに、各組に別れ、それぞれ映像の撮影]

#### 11月22日(月) (第4日)

09:00-15:00 撮影したビデオの編集 (5組それぞれのグループの日韓の代表者2-3名)  
 他のメンバーは、ソウル市内見学  
 16:00-16:30 ガールスカウト本部講堂にてホームステイ先の家族の紹介後、各ホームステイ先に分宿

#### 11月23日(火) (第5日)

09:00-15:00 自由行動 (ホームステイ先の家族、或いは、韓国の大学生参加者と共に)  
 15:00-16:00 国際青少年センターに戻る  
 17:00-18:00 閉会式  
 18:00-19:30 送別夕食会  
 21:00-22:00 撮影ビデオの発表会  
 (国際青少年センター泊)

#### 11月24日(水) (第6日)

10:20 仁州空港発の便にて帰国

▼▼ CRT 日本委員会ニュース ▲▲

## 経済人コー円卓会議 (CRT) 日本委員会 2005 年度活動予定

2005年度におけるCRT日本委員会の活動目標は、これまでに以上にグローバルCRTなどのネットワークを通じ、世界に向けて日本での企業の社会的責任 (Corporate Social Responsibility, CSR) の活動を積極的に情報発信し、認知度や信頼を高めていきたいと考えております。

また、各企業におきましては、「利益」と「企業の社会的責任」を両立できるのかどうか、また全てのステークホルダーまでを重視した経営戦略にこの考えをどう盛り込み、実践することができるのか、といったことが大きな課題となってきております。

これらの目標を達成するために、当会としても皆様のご協力を得ながら、“「利益」と「企業の社会的責任」の両立～CSRの実現に向けた取り組み～”をテーマにした活動を行い、皆様のお役に立つような活動をお手伝いさせて頂きたいと考えております。

### 1. 「CSRイノベーション」の本格的導入

企業のCSR推進体制構築をサポートする診断ツール「CSRイノベーション」の本格的導入に向けて稼働します。また様々なコンサルタントや協力団体との連携を図り、各企業の導入に向けた体制を整備します。研究会並びに研修会など

1. CRT交流会 (3月9日)
2. 経営者向けCSR研究会 (年2～3回)
3. 実務者向けCSR研究会 (毎月)
4. 日本能率協会のCSR経営推進協議会  
日本能率協会が主催するCSR経営推進協議会において「CSRイノベーション」のトライアルを実施します。
5. 日本能率協会の教育プログラム (7月)  
日本能率協会の社会人を対象にした教育プログラム (Global Business Leaders) のサポートを行います。7月7日～9日 (スイス・コーでの開催予定)
6. MBAビジネススクール  
MBAのカリキュラムにおいて、企業倫理やCSRに関する授業のプログラム作成に携わります。
7. 尾崎行雄記念財団との研究会発足  
「CSRイノベーション」を政治家向けの自己診断ツールとしての活用について研究します。

### 2. CSRキャンペーン (5月)

CSRの国際的動向をテーマに、海外からゲストを招聘し、他団体とジョイントセッションを開催します。このキャンペーンでは、CSRをより多くの方々にも理解して頂くように、さまざまなステークホルダーを対象にした講演会を開催する予定でおります。

### 3. 第20回CRTグローバルダイアログ (10月20日～22日)

“グローバルイノベーションにおける「企業の責任」について (仮題)”

第20回CRTグローバルダイアログは、ポーランドで開催されることが決定しました。主に経営者たちがグローバルな視点で企業が果たすべき責務についてダイアログを行います。またこのグローバルダイアログでは、日本から“共生”の理念や長寿企業の秘訣に加えて、日本企業のCSR活動の取り組みについても発表する予定です。

CRT日本委員会事務局長

石田 寛

## — 会員の活動紹介 —

会員の方々がそれぞれどのような活動をされているのかをご紹介するページです。皆様からのご投稿も歓迎致しますので是非お寄せ下さい。

### 音楽により生まれる絆

高橋 久子  
主婦、地域ボランティア

去る12月18日(土)、IC総会の終了後にクリスマスコンサートと題して音楽のひとつときを持ちました。まだデビューしたばかりの新進バイオリニスト斎藤アンジュ玉藻さんをお迎えして約一時間、「タイスの瞑想曲」、「アベマリア」、バッハ無伴奏曲パルティータ「シャコンヌ」、天使が舞い降りるといわれる「ロザリオソナタ」など熱のこもった演奏を真近くで聴くことができました。心に響く美しい音楽を皆で共有するという貴重な体験をいたしました。

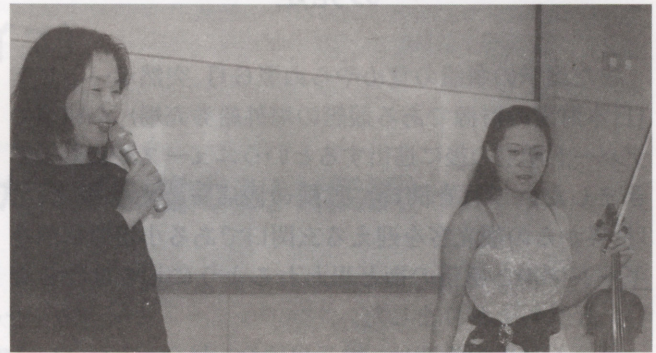
バイオリニスト斎藤アンジュ玉藻さんは、10才のころ父親を亡くしショックから学校へも行くことができなくなり生きる希望を失いそうになっていた時、たまたま我が家の音楽仲間とバッハのブランデンブルグ協奏曲5番を演奏する機会がありました。その時にバッハの音楽にめざめ力を与えられ立ち直るきっかけとなりました。以降バッハについての研究を重ねてこられました。

そして十年余りの月日を経て、昨年8月バッハゆかりのライブチヒ聖ニコライ教会に招かれデビューリサ

イタルを行い2000人の聴衆から総立ちの喝采を受けました。

また、12月にはオランダ・アムステルダムでのバッハ、ブラームスプログラムの公演では25分間拍手が鳴り止まない程だったそうです。今、彼女は「常に誰かの為に心のこもった演奏をしたい」と語っています。

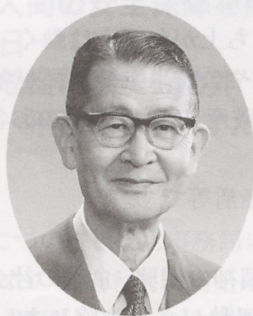
我が家の音楽仲間から始まり発展したホームコンサートは11回を重ねています。地域の皆さんに支えられこのように若いバイオリニストが巣立ち花開こうとしていることに感動を覚えます。そして、音楽により生まれる心の絆を大切にしていきたいと思っています。



●斎藤アンジュ玉藻さん(右)とお母さん

### 「誰が正しいかから何が正しいかへ」

— 『すてきな小田原をめざす100人委員会』の新しいアプローチ—



MRA(現IC)小田原サークルの結成

二宮 秀夫

IC(MRA)小田原サークル世話人代表

の校舎の鉄筋化のためにと持続され、今日に至っています。周囲に6校の学校があるという環境もあり、反対運動が続けられましたが、経済優先の時代の流れで今日まで続いています。

今から10年程前、政治改革が叫ばれ、平成維新と騒がれた時、競輪場の近くの住民の方より、「MRA(現IC)は何をしている、足許のギャンブル場の廃止さえできないのか?」と問われ、「それでは共に立ち上がりましょう」とMRA(現IC)小田原サークルを結成し、毎月一

小田原競輪場は、戦後、戦災復興の財源として期限付きで設置されました。しかし地方財政が厳しく、小学校

回例会を開き、日本を変えるには先ず足許からと、その方策を話し合い始めました。

一人ひとりの在り方が国の在り方である、人が変われば国が変わる、先ず小田原を変えよう、そのためには自分たち自身の在り方から変えよう、と自己変革の研鑽を積み、小田原の病弊を具体的に一つひとつ正していこうと目指し、既に十年が経過しました。

平成15年12月にサークルに参加されている加藤憲一氏(当時39才)が若い方々に推され、足柄平野の可能性を引き出し小田原を変えようと市民に呼び掛け、「小田原を拓く力」というNGOを立ち上げました。そして、平成16年5月の市長選に立候補しました。現小沢市長(60才、4期目、共産党を除く全政党の推薦を得る)に対し、組織も地盤も金もない無名の青年が立ち上がったのです。その結果は、現市長3万8千票に対し、3万2千票と6千票差まで追い付きました。全く常識を破る結果でした。

## 『すてきな小田原をめざす100人委員会』の発足

まだ選挙の余韻の覚めやらぬ翌6月、突然ボートピア(日本財団の財源である競艇の場外船券売場)が駅前へのデパート撤退の後に進出するというニュースが伝わってきました。これを聞いて近隣の商店主たちが集まり、「世界からの観光客を迎える玄関口である小田原駅前をギャンブルと風俗の街と思われるようにしてはならない」と立ち上がりました。

ボートピアの設置は、地元自治会、議会、市長という三者の同意が必要という許可基準の通達がありますが、当の自治会員が知らないままに、所属自治会長印のある同意書が主権者に渡され、既に市に届け出がなされていたのでした。後は、議会と市長の同意を取り付ければ許可が下りてしまうため、直ちに陳情をおこなうことを決しました。そこで10名程の近隣の人々が共に呼び掛け人となり、『すてきな小田原をめざす100人委員会』を結成することとなりましたが、1週間足らずで賛同者、131人の委員が集まりました。7月31日に結成、直ちに署名運動に入り9月の議会に間に合わせるべく活動を進めたところ、わずか1ヶ月で2万人弱の署名が集まり、8月31日に議会に陳情書を提出、併せて、市長にも要望書を提出しました。

又、一方で地元の小学校や中学校のPTAも立ち上がり、夏休み中にも拘わらず、5千余の署名を集め陳情しました。その結果、9月9日、総務民生委員会で審議され、継続審議となりました。議会では3議員が質問しましたが、市長の答弁は、「賛成も反対もあり、オール小

田原の立場で暫く推移を見極め判断したい」ということでした。又、議会開会前の地元タウン紙のアンケートでは、30名の議員中、賛成1名、反対12名。回答しない、及び保留17名ということで、回答しないという理由の殆どが、「事業計画の詳細が未発表で情報資料が不足しているため」ということでした。

市長も保留、議員も共に事なかれ主義に流され、確固とした哲学のなさを感じました。

9月15日には良識ある判断で、ビルオーナー側が出店を撤回すると市長に申し出られ、とりあえずこの件は阻止されました。しかし、まだ他にも空きビルがありますので、新たに、「小田原駅周辺のギャンブル進出反対決議を求める陳情書」を提出、現在委員会で継続審議となっています。

## 建設的な代案を

又、今回の反対運動はただ単に反対するのではなく、空き店舗に苦慮しているオーナーのために代案を提出し、それを推進するよう、市と市民に呼び掛けました。その結果、空き店舗の一部ではありますが、生涯学習の施設として市が借り上げることとなり、議会も異例の早さで予算を承認しました。すてきな小田原をめざすことを目的とし建設的な代案を示したことが共感を得て、短期間に署名が集められたのだと思います。

正に「誰が正しいかではなく、何が正しいか」で進めた結果と思われれます。

今回の運動を振り返って幾つかの問題点等がクローズアップされました。

- (1) 自治会の運営が民主的でない
- (2) 議会が十分に機能していない  
(市民より議員の方が情報不足)
- (3) 国土交通省の行政が形式主義  
(近隣の同意が所属自治会だけの同意ですまされている)
- (4) 市民が立ち上がれば市は動く
- (5) 慈善事業や公益事業の財源がギャンブルの犠牲者(破産、家庭破壊)のお金でまかなわれる

以上のような矛盾等です。

市民の推議の精神の振興、企業の社会への貢献で、この矛盾をなくす運動が必要と感じました。これが次の我々の努力目標です。

## 《IC 国際会議のお知らせ》

### ■第 28 回 IC 小田原国際会議

《テーマ》『やすらぎの家庭、思いやりのある社会、誇りを持てる国、そして、平和な世界を作るために』（予定）

日時：2004年6月10日（金）～6月12日（日）

会場：アジアセンター ODAWARA

神奈川県小田原市城山4-14-1 TEL：0465-22-6131

本年もアクション・フォー・ライフ（註3）の修了生を中心とした、オーストラリア、マレーシア、インドネシア、ベトナム、カンボジア、韓国からの青年を初め、様々な人種・宗教・年齢・背景から成る多彩な参加者が参加される予定ですので、どうぞ奮ってご参加下さい。会議の詳細については、追って案内状をお送り致しますのでご覧下さい。

【註3：アクション・フォー・ライフ（AFL）各国の青年たちが寝食を共にし、インドを初めアジア各国を回りながら、その国々の人々と知り合い、文化等も学ぶと共に、自分自身の成長を図ることを目指す9ヶ月にわたるIC国際青年教育プログラム。2001年の9月から第1回が、2003年の9月から第2回が開催され、本年の9月1日から2006年の8月3日まで第3回のプログラムの開催が予定されている。尚、詳細について知りたい方はIC事務局にお問い合わせ下さい】

### ■第 59 回コー IC 世界大会（スイス）

7月7日～8月20日

総合テーマ『理想と実践のへだたりを縮める』（仮訳）

7月7日～13日

・「奉仕の精神、責任感、リーダーシップ  
— 社会的な、そして世代間のギャップに橋を架ける価値」

7月16日～24日

・「ヨーロッパのための心と魂」

7月27日～8月3日

・ファミリー会議「国際コミュニティでの共生の体験」

8月5日～11日

・「人間の安全保障を前進させるための良き統治」

8月13日～19日

・「危機に瀕する世界  
— 平和をもたらすためのすべを学びあう」

※詳細については、IC事務局にお問い合わせ下さい。  
尚、いずれの会議も会議開始の6週間前までの参加申込みが原則となっていますので、ご参加ご希望の場合には早めにお手続き下さい。



●コーでの食事風景（昨年の会議に参加された服部さん、右、とアンゴラ人の青年）コーでは世界中からの参加者との対話を通して世界の実情と動きを知ることができる

◆◆◆ IC ニュース ◆◆◆

■ ICよつ葉会の 2005 年度活動計画

2005年度のICよつ葉会は、代表として昨年末2年の任期を終えた和田マリアンネさんを再度選出致しました。新たな実行委員会に於いて、活動方針として「女性の特質を活かした活動とネットワーク」を掲げ、様々な活動に反映させて行くことと致しました。

月例会（毎月第4月曜日）活動としては、お互いをより深く知るためのストーリーテリング（メンバーの方々に、ご自分の人生の転機について、一時間程度お話して頂き、各人の自己啓発の契機として頂くもの）を中心に、講演会&ミニバザー、音楽会の開催、1泊2日のリトリート（「退去する」「交替する」の意で、忙しい日常生活から離れて、美しい自然の中で、自己の心の内を検証する時間を持つこと）、他団体との交流、コーラスなどを予定。

支援活動としては、助成金など温かな視点で随時心をそそいで参ります。

又、本年は今までの活動を小冊子としてまとめることも計画しております。

2005年度ICよつ葉会は共に語り合い、わかち合い、担い合ってICの発展のため、活動して参ります。

お一人でも多くの方々と共にお願い、ご賛同下さる方々のご来会を心より期待しております。

（お問い合わせは 090-4742-1460 和田まで）

ICよつ葉会実行委員会

■ IC事務所の移転

来る3月12日に事務所を移転することになりました。現在の事務所から歩いて5分程の場所にあり、昨年末に一足先に移転したCRT（経済人コー円卓会議）事務局と事務所を分け合う形になります。

新しい住所は、渋谷区桜丘町29-33 渋谷三信マンション505号です。尚、電話並びにファックス番号は従来通りで変わりありません。新しい事務所にもどうぞお気軽にお立ち寄り下さい。

スマトラ沖地震による津波による被災者支援のための募金について

この度の津波の惨事に当たって、バンコク在住で元ICの専従をされていた杉裕雄さんが直ぐさま被災地のプーケットに向かい救援ボランティア活動に当たられました。大変な状況が目につかぶようなレポートを送って頂きました。今後も時間を見つけてボランティア活動に当たられるそうです。また、インドネシアでもICの青年たちがボランティア活動に励んでいるとのこと。スリランカでもICの関係者が被害に遇っています。こちらは、急遽帰国されたカピラ・バンダラさんからも状況をお聞きしました。スリランカでもインフラは徐々に回復しつつあるようですが、今後は学校での学用品や被災者の方々の生活必需品や生活の手立てへの支援等、新たな支援が必要になってきます。これら被災各国のIC関係者と協力しながら現地で一番必要とされている支援を行っていきたいと思います。もし、ご協力下さる場合には次の口座宛ご送金下さいますようお願い申し上げます。

郵便振替口座 東京 00180-0-38289 口座名 社団法人 国際IC日本協会  
（お手数で恐縮ですが、通信覧にスマトラ沖地震募金とお書き添え下さい）

編集後記

本年初めてのニュースをお届けいたします。今号では、「許しと和解」の重要性について考えました。昨年7月にカンボジアで開催された第11回ICアジア・大太平洋青年会議（APYC）には、ベトナムから20名余の青年も参加し、長年の歴史的経緯から相互に大きな不信感を抱えるカンボジアの青年たちとの率直な対話が始まったと前号のニュースでお伝えしました。その後、11月には14名のカンボジアの青年たちがベトナムに招かれ更に交流が深められたとのニュースが入りました。又、本年も日中韓の大学生による第2回東北アジア青年フォーラムを韓国で開催することが決まりました。歴史の傷を癒し、未来へと希望をつなぐための青年たちの活動を、本年も支援して行きたいと願っています。（K.N.）